

徒然草

新説「インチキ野郎」と「パンパン娘」

浅沼 信爾

一橋大学国際・公共政策大学院客員教授

広辞苑を見ると、この二つの言葉の語源は不明あるいは未詳と書いてある。一説によると、インチキとは駿河国小笠郡の方言で餌を用いない釣り針「餌(え) 無き鉤(ち)」が転じたもの、またある説ではイカサマの「イ」に軽侮の意味を持った接尾語のチキがついたものと言われる。

もう半世紀も前に、若い世銀のエコノミストとしてマレーシアに頻繁に出入りしていた頃、マレーシア政府の会議に出席する機会が多くあった。そんな会議の議事録は、イギリス官僚組織の習いで、出席者の内の一番の若輩が書くことになっていて、若いマレー人官僚の書いたドラフトが回ってくる。そんな議事録に載っている、出席者のわたくしの名前は、Inche' Asanuma となっていた。わたくしの世銀の同僚でアメリカ人やイギリス人は Tuan Wade 等になっていたのに、である。訊いて見るとマレー人や欧米人には Tuan を、マレー系でない主として中華系のアジア人に Inche' を使うらしい。(Inche' と言う綴りは、後にマレーシア政府とインドネシア政府の間で国語綴りの共通化をしたときに、よりスマトラのマレー語に近い Incek (発音はインチェック) に統一された。)

ちょうどその頃、マレーシアは、従来マレー半島とシンガポールの「海峡植民地 (Straits Settlements) で使っていた「海峡ドル (Straits Dollar)」を廃止して、新しい「マレードル (マレー語で Ringgit)」を導入しようとしていた。前者は、「海峡カレンシー・ボード (Straits Currency Board)」の発行で、英国のポンドにリンク、一方のリングgitは、米ドルに固定された通貨だった。まあ、第二次世界大戦後の大英帝国の衰退を反映した通貨制度設計だったのだろう。

問題は、この二つの通貨が平行して流通していた移行期一すなわち 1960 年代の半ばに、英国のポンドが (対米ドルで) 切り下げられたことだ。マレー半島北の島にある商業都市ペナンと対岸のバターワースの中華系商人はすぐさまマーケットに買い物に来る客が海峡ドルで支払う場合には、リングgit値段よりも高い価格を要求する。しかし、近隣の農村からやってくるマレー系の農民が、複雑な国際通貨制度を理解できるわけがない。「また華人の野郎どもがわれわれを騙すのか」というわけで、華僑の店が焼き討ちに遭う暴動が起こった。「華人の野郎」とは「インチェック」で、インチキするのは「中国人する」という意味なのだ。

第二次世界大戦中にマレーシアとインドネシアにいた日本人の兵隊さん達が、この「インチキ」という言葉を日本に持ち込んできて、「人を騙す＝華僑商人」の意味で使い始めたのではないか。これがわたくしの新説 (珍説) だ。

そんなこんなで、Inche' Asanuma が嫌いになったが、日常の会話ではマレーシア政府の若い友人達は、わたくしのことを Tuan Hasan Omar と呼び始めた。なぜか。アサヌマなんていう名前はマレー人にとっては変な名前だ。フィールドにでて、農民なんかと話すときにアサヌマと紹介されると、「ハサン・オマール（あるいはウマール）」と聞こえるようだ。ハサン・ウマールを早口で言ってみて下さい。こうした事情で、わたくしの名前は Hasan Omar になった。インチキ・アサヌマよりよっぽどましだった。

さて今度は、「広辞苑」でパンパンを牽くと、「原語不詳、第二次世界大戦後の日本で、街娼・売春婦のことを指した」と書いてある。

1970年代半ばにインドネシア政府のパートタイムお雇い外国人として、しばしばジャカルタやその他の都市で仕事をしたから、いろんな会議やパーティーに出た。ちょっとした演説は必ず「紳士、淑女諸君」という呼びかけで始まる。インドネシア語では、”Bapak-Bapak dan Ibu-Ibu”だ。パパが紳士、二度繰り返すと複数になる。(最後のkは無音。)そしてイブとはご婦人・夫人と言う意味だ。インドネシア語もマレー語も同じスマトラの言葉なのだが、マレーシアでは、「紳士、淑女諸君」は、Tuan-Tuan dan Puan-Puan と言う。まあ、「旦那方やご婦人達」位の感じだ。Tuan は先にも紹介したように Mister だが、Puan は女という意味だ。(正式のインドネシア語では Perempuan。マレー語は、インドネシア人にとっては Melayu Pasar、「市場のマレー語」、すなわち簡略化された、俗マレー語で、いろんな簡略が多くて、ちょっと乱暴に聞こえる。)

最近英語圏で評判の高いマレーシア出身の小説家に Tan Twan Eng がいる。彼はいままでに The Gift of Rain とか The Garden of Evening Mists という作品を発表しているが、主題は常に、第二次世界大戦前のマレー半島のイギリス人と華僑とマレー人の世界とそこに闖入して来た日本の軍隊だ。日本軍はいろんな悪いことをした。その一つが、兵隊のための「慰安所」を作ったことだ。町にも、ジャングルの中にも。そして、近隣の若いマレー人や華人の女性を強制的に慰安所に連れてきた。Tan Twan Eng の小説には、日本の軍人や軍属と彼らが慰安所でしたことが出てくる。日本兵や軍属は、ことある毎に女達—Puan-Puan—を欲しがった。日本軍が駐留する近郊の住民にとって、いかにして日本軍の「女狩り」から逃れるかは、深刻な問題だった。

第二次世界大戦後に日本に引き揚げてきた兵隊さん達が、東京や大阪の闇市場で、Puan-Puan、すなわちパンパンという言葉を使い始めたのではないか。これが、わたくしの「パンパン語源」の新説だ。

わたくしの新説が正しいかどうか証明するのは難しいかも知れない。しかし、日本語に取り入れられたマレー語、インドネシア語の語彙がそんなに多くないなかで、目立つのが「インチキ野郎」や「パンパン娘」等という野卑な言葉だというのは、なんと悲しいことか。しかも、それを持ち込んだのが他国を侵略した日本国の軍隊の兵隊さん達だったとは。